

日本語学習者の発話に見られるフィラー「こう」について

The characteristics of Japanese filler "KO:"
appeared in superior level Japanese language learners' utterances.

小 出 慶 一*

1. はじめに ——問題の所在と目的

1-1. 日本語学習者のフィラーと日本語能力

日本語母語話者はもちろんであるが、日本語学習者の発話にもフィラーが現れる。その方で、フィラーは、日本語教育のなかで意識的に学習対象になることがほとんどないものである。たとえば、手元にある2, 3の教科書を見ても、呼びかけに「あのう、すみません」などと「あの一」が出現するくらいである。もし扱われたとしても、この「あの一」のように、慣用度の高い用法が扱われているだけで、より自由度の高い用法が取り上げられることはほとんどない。

しかし、興味深いことに、学習者はいつの間にかフィラーを使用するようになる。そして、初級段階はともかく、中級以上の学習者になると、日本語としての自然さを持ったフィラーを使うようになる。

また、さらに興味深いことに、学習段階と出現フィラーのあいだには一定の傾向が認められるという事実がある^(注1)。たとえば、KY コーパスの各レベル2名ずつについてフィラーの出現を調べてみると、表1のような分布を示す。

(なお、この数字は、フィラーの認定など、基準の立て方によって変わる可能性のあるものであるが、だいたいの傾向を示すために挙げた。その点をお断りしておく。)

表中の「アー」とある欄は、「アー、アーム、ウーン、ウーム」など母音を延引する形のものであり、日本語というよりは、母語のフィラーを引きずっていると感じさせるものである。また、「副」としたのは、「まあ、なんか、もう」など副詞と同形のフィラーを指すものである。また、「話者」の欄のE、C、Kはそれぞれ英語、中国語、韓国語を母語とする話者であることを示し、NH、IH、A、Sは、それぞれ Novice High (初級上)、Intermediate High (中級上)、Advanced (上級)、Superior (超級)を指す。KY コーパスでは、4つの級が設定されていて、初級、中級にはさらに3つの下位区分があるが、ここでは、各級の違いが明確になるように、1つのレベルのみを示した。

表中の数字は、全発話中での各フィラーの出現数を示す。

表1 KY コーパスでのフィラーの出現傾向

		ア ー	ア ノ ー	ソ ノ ー	コ ノ ー	エ ー	エ ー ト	副	コ ウ
	話者								
初級	ENH01	36	3	0	0	0	2	0	0
	ENH02	82	1	0	0	0	0	0	0
	CNH01	34	11	0	0	27	0	1	0
	CNH02	127	0	0	0	1	11	0	0
	KNH01	48	0	0	0	1	0	0	0
	KNH02	94	1	0	0	2	0	0	0
中級	EIH03	24	90	0	7	0	0	0	0
	EIH04	12	122	6	0	0	0	8	0
	CIH01	34	2	0	0	4	0	5	0
	CIH02	18	90	0	0	4	0	0	0
	KIH02	34	2	0	0	1	0	12	0
	KIH01	0	6	1	0	1	0	3	0

* こいで・けいいち

埼玉大学教養学部教授，日本語教育

		ア ー	ア ノ ー	ソ ノ ー	コ ノ ー	エ ー	エ ー ト	副	コ ウ
	話者								
上 級	EA01	6	154	6	0	0	0	19	0
	EA02	40	2	3	0	40	9	32	0
	CA01	0	126	0	0	0	3	2	0
	CA02	5	171	3	0	0	3	26	0
	KA01	7	2	0	0	2	1	0	0
	KA02	22	37	0	0	2	1	22	0
超 級	ES01	19	98	0	0	5	4	54	1
	ES02	11	63	7	1	2	0	21	1
	CS01	6	1	1	0	54	4	38	26
	CS02	9	102	0	1	4	14	46	29
	KS01	9	68	6	0	1	25	44	0
	KS03	8	3	2	0	10	2	70	44

日本語レベルと出現フィラーの関係を強調するために、表では、当該レベルで新たに出現するフィラーに網かけを施した。この網かけ部分をたどると、日本語能力レベルと出現フィラーとの間に概ね次のような関係のあることがわかる^(注2)。

1. 日本語学習者のレベルごとの出現フィラーの推移傾向

初級：母音延引系（「アー」類）

↓

中級：指示詞系 「あの一」

↓

上級：副詞系 「まあ」「もう」
母音延引系 「えー」「えーと」

↓

超級：指示詞系 「こう」

それぞれのレベルに特徴的なフィラーについて、簡単に紹介する。

まず、初級レベルで現れる「あー類」であるが、これは、日本語の中で通常使われるものではない。2のSは英語話者であるが、英語の“uh”などを援用したものとも見ることもできるものである。この段階では、日本語的なフィラーを使用するに至っていないものと思われる。

2 T：ん、そうですか、〈はい〉えとどこへ行きますか、〈あー〉うん、〈んー〉{笑い}
例えば

S：あー、〈うん〉、あーこうやさん{笑い}、
〈うん〉あーみのさん、あー、ひえいざ
ん、〈ん、うん〉です (ENH02)^(注3)

次は中級レベルでの「あの一」である。初級では現れず、中級レベルで急激な増加を示すものである。しかし、中級レベルでは「あー」類の使用もまだ多く、「あー」類から「あの一」へのと、フィラーについても、より日本語的なものへと移行する時期なのだと思う。詳細な検討は別の機会にゆずるが、このレベルでの「あの一」は、例3を見てもわかるように、日本語母語話者の「あの一」と比べると、聞き手との相互的な調整機能は弱く、より話者向きの自己調整機能に傾いているように思われる。

3 T：は一、アイビーリーグというのは何ですか

S：そうですね、あの一、アメリカの一流大学の中で、あの一8つの大学は、アイビーリーグというあの一、会があります、それで、あの一はじめては、あの一運動会でしたけど、それは4つの大学でしたので〈はい〉あの一、ローマ字でI Vというのは、よよよ4つ、4という意味ですね、〈ああ〉だから、(...) (EA01)

次の段階である上級レベルになると、副詞系のフィラーが多く現れるようになる。「えー」「えーと」もこのレベルで増加がみられるが、中級レベルとの顕著な違いは副詞系のフィラーが増えることである。例4に「まあ」の例を挙げる。副詞系のフィラーで多く使われるのは「まあ」

「もう」「やっぱり」であるが、いずれも副詞としてはモダリティ表現にかかわるものである。このような副詞を学習するのは、学習がある程度進んだレベルであり、そのために上級になってはじめて現われるということもあると思われる。またメタ言語的な側面も持つ表現であり、そのような語の性格によっても出現が遅くなるのだと考えられる。

4 T : じゃあその、言語学的に見て一、例えば日本語と英語を比べると、〈うん〉まあどういふところが大きく、違う一というてことありますか

S : んん一、まあ—そんなにないけど一やっぱり日本語の、〈ええ〉ま言葉をつくりかたとか一文法的に、〈うん〉簡単、と思う (EA02)

そして超級になると「こう」が出現する。表1では、中国語、韓国語話者に多く出ているが、英語話者でも次に示す ES07 話者では、40 回以上出現しており、言語による差があるのかどうかは判然としない。

5 T : ああ、〈ええ〉あのその時はあ一どうして日本にいらしたんですか

S : (…)
ええっとその一3 か月とか4 か月一ずつというここ長い、〈えーえー、はいはい〉あの期間、あの一日本に、〈ええ〉こう遊びに一、来たん一ですよ、まあその、母親の里帰りにこうついて来たという、〈はいはいはい、えーえー〉ことですが、〈えーえー〉うん、んで一こう日本がすごく、まあ、なんといひますかね、おもしろいといったらなんか、〈うんうんうん〉なんかえ、変な言い方なんですけれども、(…)
(ES07) (注4)

学習者の日本語レベルと出現フィラーとの間には、以上のように、相関が認められ、「こう」についていえば、「こう」は超級になってはじめて出現する、あるいは、超級までは現れないものと思われるのである。

問題は、なぜ「こう」は超級までは現れないのか、超級になってはじめて現れるのか、ということである。このことは他のレベルとフィラー「あの一」「まあ」などとの関係についても問わなければならないが、この稿ではそのうち「こう」を取り上げることにしたい。「あの一」「まあ」などは、あるレベルに達して急激に増加するが、「こう」ほど劇的な出現を見せるものではない。それだけ、「こう」固有の性質があるのではないかと予想される。

また、本稿では、「こう」と同じく、コ系指示詞に由来を持つ「この一」(注5) についても、「こう」の性格を検討する手がかりとして取り上げるが、それは、「こう」と同じくコ系の指示詞に由来するものでありながら、「こう」と比べて著しく出現頻度が低いという特徴があるからである。なぜ「こう」に比べて、「この一」は出現しないのだろうか。たとえば、『インタビュー形式による日本語会話コーパス』(以下、HCSJ) でも、母語話者での「この一」の出現率は、100 ターン当たり 0.6 回(小出 2008) と低く、また、非日本語話者の場合は、それ以下である。つまり非母語話者の発話にはほとんど出現しないのである。それは KY コーパスでも同じで、KY コーパスでも「この一」はほとんど現れない。英語・中国語・韓国語それぞれを母語とする超級学習者各 5 人(計 15 人)の「この一」の出現状況は次のようになっている。全数でも 6 例にしかならない。また、認定の仕方によってはもっと少なくなる可能性もあり、「こう」と比べると圧倒的に少ないのである。

表2 KY コーパス超級学習者での「この一」の
出現状況（話者は各言語5人ずつ）

	英語 話者	中国語 話者	韓国語 話者
「この一」を 使った話者数	2人	1人	0人
「この一」の 出現数	5例	1例	0例

その中の1例を挙げると次のようなものである。この例についての検討は後に行いたい、ここに出現している2つの「この一」のうち、第1のものはフィラーなのか指示詞なのか判定が困難なものである。

- 6 S : (...) あの一ことでわたし、このこっ
ちのこ、これを入れ替えたりしたぐらい
ですからね
T : こ（ええ）れと申しますと
S : いやいや、ここのこの足の、ここのソ
ケット、、、あのおんたも2つあるでしょ、
{カチカチ音} 〈ああ、はい〉 こんなの
〈はい〉 が、これを僕は、この一、金
物が入ってるんですよ、〈ああそうです
か〉 でも、これでもテニスやったりし
ますけどね、〈ああそうですか〉 うん
(…) (ES02)

1-2. 本稿の目的

日本語学習者のフィラー「こう」「この一」には、以上のような出現状況がある。本稿の関心は主として「こう」にあるが、「この一」と比較しつつ、次のような問題について検討を加える。

- 1) フィラー「こう」と「この一」に出現頻度に差があるのはなぜか、
- 2) 日本語能力レベルが上がるにつれて「こう」が出現するようになるのはなぜか。
なぜ「この一」は現れないか。

この検討を通して「こう」の性質を明らかにしたいと考えるが、それはまたフィラーと発話形成との関係を明らかにすることにつながるものと考えている。

2. 日本語母語話者のフィラー「こう」と「この一」

小出(2009)では、日本語話者のフィラー「こう」と「この一」について検討を行ったが、必ずしも整合的でない部分もあったので、その問題点を修正しつつ、本節で2つのフィラーの機能について検討を加える。

2-1. 「こう」の性質

まず、「こう」についてであるが、小出(2009)では、「こう」の出現文脈を観察し、「こう」と次のような表現との共起がしばしば見られることを指摘した。多く見られたのは、次の2つである。

そのひとつは、「こう、Xっていうんですか」「こうXっていうんでしょうか」というように、「こう」に「～っていうんでしょうか」などの表現が後続するものである。

- 7 2 : それとか、(1 : うん) あの一、僕は、あの映画観た後で、 番最後にこう、クレジットっていうんですか(1 : はいはい)？あの一、どこで、撮影したとか、(1 : はい) 誰がやったっていうのが(1 : はい) 出ますよね(1 : はい)。(TOM) (注6)

- 8 2 : あとはあの一、(1 : うん) あ的主人がイラン人なんですけれども、(1 : はい) あのをこうのこう一、くねくねとした踊りっていうんでしょうかベリーダンス、とは(1 : ベリーダンス) またち

よっと違うんですが、(…) (IOf)

「こう、Xっていうんですか／っていうんでしょうか」という表現は、「X」に当たるものの表現の適格性を問いつつ、臨時的暫定的に表現を提出するものと考えられる。7では「クレジット」、8では「くねくねとした踊り」が、その「X」に当たる表現である。7では、その後の文にも、「～というのが出ますよね」というような、Xの表現が適当かを問う表現が現れている。8でも、後続の「～とはまたちょっと違うんですが」という言い方に、X部分の表現の不安定さが現れている。

もうひとつの表現のタイプは、「こうXみたいな／ような／という感じ」というように様態表現を伴うものである。これは、対象の呼び名が明確でないために、類似のものにたとえて表現しようとするものである。

9 2：高校の時までは絶対駄目なんです。

(1：何でも駄目ですね、はい) 予備校一に入ったらもう、何でもオッケーなんですね。(1：うん) で大学でも、あるじゃないですか、(1：うん) こう、喫煙スペースみたいなの。(…) (TOM2)

10 2：(…) あの、本当は、もう少しあの一、こう実際のな、学生の一、誤用分析のようなことも(1：ええ、ええ、ええ) やりたかったんですけども、(…) (TSf2)

11 2：政治的には、政治的にも経済的にも非常にこう、優等生という感じ(1：あ、そうですか) ですね。(TNf)

これらの例では、9「喫煙スペース」、10「実際のな学生の誤用分析」、11「優等生」という表現が、種の比喻として使われていて、それら

は確定した表現ではなく、臨時的近似的なものであることが示されている。以上の点は、小出(2009)で述べたことであるが、これが何を意味するのかについての検討が十分ではなかった。その点を以下に述べる。

さて、「こう」は、以上のように、非確定的な表現の出現に先だって現れているが、このとき心的には、表現対象と、それをどう表現するかという問題が存在している。「こう」はこのときどんな働きをしているのだろうか。

この問題を考えるために、ジェスチャーの機能を知ることが手がかりになると思われる。それは、副詞「こう」が発話時のジェスチャーと連動して現れることがあるからであり、ジェスチャーの生成と密接にかかわっていると考えられるからである。

ジェスチャーとは、喜多(2002)によれば、

12. 何かを伝えようという意図のもとに起こる行為の環として、ある身体の動きが発現し、それが伝えるべき内容に関連のある情報を表わしているとき、その身体の動き (p.14)

であるということになるが、このように規定されるジェスチャーの中で表象的ジェスチャー(註7)と呼ばれるものの生成と、「こう」の間には種の近縁性があるように思われる。斎藤・喜多(2002)によれば、表象ジェスチャーが生成される背景として次のようなことが指摘されている。

13. 無主体的な観点から捉えられた「生のままの」イメージを加工することによって、それが命題的情報に翻訳したときに言語化が容易になるようにする interface のメカニズム(運動的空间的思考と発話生成をと

りもつもの) とによって、表象的ジェスチャーは生成される。(p.14)

ここで重要な点は、発話の過程で、運動的空間的思考と発話の命題とが併存しているという仮説である。運動的空間的思考とは表現対象の言語化以前の形でもある。その2つの間のインターフェースとしてジェスチャーがあるとされるが、ここでもう一つ重要なのは、表象的ジェスチャーに関する次の仮説である。

14. 表象的ジェスチャーは単に心的表象の外化に過ぎないのではない。ジェスチャーをすること自体が、ある特定の心的表象(「右」または「左」という概念)を発話のために導き出すことにつながる。(喜多 2002: 107)

この考えによれば、「右に曲がる」ということを示す時に右手で右方向を示すのは、「右」という語を導き出すためのジェスチャーだということである。身体的な動作と発話との間にこのような関係が成り立つとするならば、慎重な検証が必要ではあるが、ひとつの可能性として、「こう」という動きを指示する語は、メタ的なジェスチャーとして、発話を導くための役割を果たしているのではないかと考えても、あながちの外れではないだろう。

副詞としての「こう」は、次のように使われる。

- 15 a. ドアを開くには、この取っ手を、こう回せばいいんですよ。(作例)
b. ねぎは、こう左手でおさえて切るんです。(作例)

ここで「こう」が指しているのは、身体の動作である。「こうやって、こうやって」という風

にも言えるし、「こう、こう、こう・・・」と「こう」だけでも身体的な行動を追いかけながら指示することは可能である。「こう」は、言語的な表現のむずかしい動きを指す働きをしており、その動作そのものは言語化されていない。しかし、単に動作を指すだけでなく、言語表現を伴っている。身体の動きと「こう」は連動していて、相互に影響し合っているものと考えられる。動作が変われば表現も変わる。「こう」は、動作を促しつつ、表現の生成へと導く働きをする。あるいは、動作を誘導することで、言語表現の生成を助けるとも言える。

フィラーとしての「こう」が、「～っていうんですか／っていうんでしょうか」「～みたいな／ような／という感じ」というような表現とともに現れるということは、心に思い浮かべられた対象が言語化しにくい、また捉えにくいものであるということを示すものでもあろう。「こう」は、その捉えにくい対象を対象として捉え、言語化しやすい形に分節する、あるいは、整形するという働きをしているのではないかと思われる。ジェスチャーが対象を表象することでその言語化を導くとするなら、「こう」は対象を対象として捉えることで言語化を導くと見ることができるだろう。

9 の「こう、喫煙スペースみたいな」という表現を考えてみると、その生成の過程では、最初に対象として“ガラス張りの狭い空間、灰皿があって椅子があって、タバコ臭い空間”というものがイメージとして把握される。そして、次にそのイメージが言語化されるわけであるが、「こう」と言うことによって対象を焦点化し、言語化を容易なものにすることで、言語化の促進にかかわっていると見ることができる。

ところで、例7～11の「こう」の対象がいわばモノ的であり、その全体を括して思い浮かべることのできるものであったのに対し、対象

がより動作的なもので時間的な広がりを持つ場合もある。

16 1 : ああー。釣り場っていうのはそういう場、決まった場所があつてそこにいらつっしゃるわけ？ 自分で、なんか、ど、あの、川を、川をこう、行きながら、ここがいいかな、つていう、風に決めるわけじゃなくて、釣り場、って決まってるんですか？ (TOM2)

17 1 : ああーなるほどね。ああー。で、主に、あの、行って、それで、こう、釣る、釣り竿を、垂れるつていう感じ、ですか。釣り糸を垂れているつていう状況が、あの、なさってる釣りですか？ (TOM2)

18 (ニューヨークの街の特徴を聞かれて)
2 : そうですねー、えー、やはり一メルティングポットいわくー (1 : あー) 人種ーがですね、様々な、世界かく、様々な (1 : うーん) 人種が、ほんとに小さいところにこう密集してるつていう (1 : はい) ところが、まず違いとして、(1 : うーん) 頭に、それがすぐに浮かびますけれども。 (CJf)

16 で言えば、たとえば「川をこう、行きながら」というのは、川を移動する様子をイメージしながら、表現が模索されている。17 でも、「こう」は「釣る」という行動をイメージしつつ、言語化に貢献している。18 では「小さいところに密集する」ということが、動的イメージとして捉えられており、それを「こう」で媒介して、言語化へと向かっているように思われる。

表現される対象は、7～11 と性質を異にする面もあるが、ここでも、「つていう、風に／感じ」「なんか」などの表現の出現が見られ、また、

いずれの「こう」も「なんていうか」というような形式模索フレーズに置き換えることができるという点で共通している。これは、副詞としての「こう」と大きく異なるところである。副詞ではこのような置換えはできない。

ここまでの検討をまとめると次のようになる。

19. フィラーとしての「こう」の性質

「こう」は、心的に思い浮かべられた対象を、言語化のために分節し、表象的な把握を行うとともに、言語生成へと向かう心的な動きを、ある場合には括して、またある場合には時間的な流れの中で捉えつつ、言語化への動きを促進するものである。表面的には、表現の模索と連動して現れるように見えることになり、「なんていうか」などの形式模索表現への置き換えが可能なが多い。

2-2. 「このー」の性質

次に、「このー」について述べる。「このー」の現れる例は、次のようなものだった。

20 2 : はい。それ (1 : うん) いろんな、あの、いろんな方があの知恵を授けてくださいましてね、あの一、うん、ボンのこの、棒ですか？ あれのう、裏にかつく、置くようにすると、鳥は狙わないとかって教えてくださいましたので、今のところそ、そういう風にしておりますが (1 : あ、そうですか)、はい。 (MFf)

21 1 : 今、金融界は、日本は色々大変、(2 : そうですね) ん、なんですが、(2 : ええ) ば、留学、なさって間一 (2 : ええ) にも、(2 : はい) 色々あったんですが、(2 : ええ、聞きました)

ねえ、(2: ええ) あの一、この、今の金融界の色々な問題、(2: ええ) バブル以後の、(2: ええ) どういう風に考えてらっしゃいますか [。] あの一、いわゆる住専の問題とか、(2: ええ、ええ) うん。(TNf)

- 22 2: (...) それで、あの一そのジャルキャップに、応募しまして、そのジャルキャップっていうのあの一、なんていうんですかね、この、アメリカに行って、ボランティアとして、日本語一、を、教えたりとか、(1: ふーん) まあ日本の文化を紹介するっていう、まあ 年間のプログラムなんですけれど、(1: はい) まあともかくちょっとアメリカに、あの一昔から留学、っていうかあの一、留学したかったんで、えっとそれに参加しまして、(…)(TSm)

フィラーの「この一」は、フィラーの「あの一」「その一」とは異なる性質を持つ。それは、種の指示性を持つという点である。

指示詞としての指示では、「このリング」「この現象」といえば、「この」が指している特定の対象が外界(文脈も含めて)に存在し、その対象が「リング」「現象」というラベルを持つと解釈される。それに対し、フィラーとして「この一」が使われた場合、「この一、時計」「この一、現象」などでは、「この一」は外界にあるモノゴトを指示するわけではない。「この一」が指示する対象は、「時計」「現象」というような明確なラベルを持つものではないと思われる。

20～22の例を見てみよう。

20の「この一、棒ですか」では、「～ですか」という問いかけ的な表現が後続しているが、これは対象は「棒」というカテゴリに当てはめられると考えるが、それが十分に妥当かどうか、

確信がないことを示すものと思われる。

21の例では、聞き手に問いたい問題が話し手にあるのだが、それをまとめる表現が確定せず、表現を探索しつつ発話している状態であることが含意される。「この」は、それらを暫定的に「今の金融界の色々な問題」と括することを示すものと思われる。その括りが不安定であるのは、そのあとに、「バブル以後の」とか「いわゆる住専問題とか」というような補足があることでもわかるが、「今の金融界の色々な問題」とはそれらの具体的な問題を含んだことがらの総称であると意識されていることが推測される。

22は、「この一」の前に、「なんていうんですかね」という表現があり、事前に、ラベルが未確定の状態であることが示されている。「この一」以下、ここではその内容の説明があり、それを括るものとして「プログラム」というラベルが与えられているが、「プログラム」という語の他にも、それを括る語の可能性はあるということが暗示されている。

「この一」は、20、21の場合では、「いわゆる／世間で言うところの～」という言い方への置換えが可能であるが、これらの表現は、まさに、対象に暫定的にラベルを貼ることを示すものとも見ることでできる表現である。

以上の検討をまとめると次のようになる。

23. フィラーとしての「この一」の性質

「この一」は、発話時に心内に思い浮かべられている対象について、その対象を把握し、表現するために必要なラベル、カテゴリ名、表現の探索を行っている時に出現し、仮の当てはめを行うことを示すものである。

「こう」も「この一」も、心的に存在する対象の表現にかかわるという点では共通している。

コ系のものは指示詞についても、発話時現在に現場にあるもの、心的に思い浮かべられているものを指すものであり、その点で、ソ系、ア系と大きな異なりを持つものであるが、コ系のフィラーもその性質を受け継いでいる（あるいは共有している）わけである。その点は共通するが、「こう」が対象の内実についての表現形成に関わるのに対し、「この一」は対象のカテゴリへの当てはめ、ラベル付けにかかわるのだと思われる。したがって、「こう」のような創造的な過程を含まない。

このことを、例で確かめてみよう。たとえば、次の例のように、ある文脈で「こう」「この一」の選択が問題になることがありうる。

- 24 2 : (・・・) スピルバーグの映画によく出て
人なんですけれど、(1 : あーあー。)
その人が、{こう・この一} 音楽家な
んですね。 (KNm)

この例の場合、「この一」ならば、この発話は、その人の職業がいわゆる「音楽家」というカテゴリであることを言っていると解釈できる。それに対して、「こう」が選ばれた場合は、その人の内的な性質が「音楽家」であって、職業が音楽家であるかどうかは問題にはならないということが含意される。「こう」の場合には、その対象の内実を表現するための模索過程があり、その結果として、対象に「音楽家」という語が与えられているのだと思われる。なお、24の原文は「こう」が使われている。

3. 日本語学習者のフィラー「こう」と「この一」 ——日本語超級学習者の場合

3-1. 「こう」の性質

このような「こう」と「この一」の違いが、

母語話者、日本語学習者に共通した「この一」の出現率の低さにつながっていると思われるが、2つのフィラーのもっとも大きな違いは、上述のように、「こう」が対象の内実に関わる表現であるのに対して、「この一」が単純化して言えば、対象を括ること、それにラベルを貼ることに関心があり、内実の表現には関心がないという点であろうと思われる。

「こう」が多く出現し「この一」があまり出現しないということが、われわれの通常の発話の性質を反映したものだとすれば、通常の発話においては、内容をどう表現するかということとは多く問題になるが、その対象にどのようなラベルを貼るのがいいのか、というようなことは、それほど多くの場合に問題とはならないということになるだろう。

それでは、「こう」が超級になるまで現れない、超級になってはじめて現れるのはなぜなのだろうか。

考えられることのひとつは、超級になってはじめて、対象のイメージを保持しつつ、それと相互作用的に言語表現化するという操作能力が獲得されるのではないかということである。

超級学習者において「こう」が現れるようになるということは、自身の発話生成の過程に、イメージ的な要素の言語的な取り込みを行いつつ発話を進めるという、より創造的な発話が行われるようになっていくということなのではないか。あるいは、イメージを伴いつつ発話が行われているということでもある。

初級段階では、このような表現プロセスは想定しにくい。それは、中級段階でも同様である。例えば、次の例25では、聞き手「T」が「どんな仕事をしてたか」と質問している。それに答えるには自身の経験を捉え直し、それを言語化する必要がある。が、この中級の話者には、それは「ちょっとむずかしいです」ということ

になる。イメージはあるにしても、それを表現できる段階にはないのである。

25 S : 大学を、〈うん〉ん卒業でて、〈ええ〉仕事をしました

T : あ、そうですか、どんな仕事をしていましたか

S : あー日本語で、〈ええ〉ちよつとむづかしいです、でも〈あーそうですか、はい、はい〉あの、人は、〈ええ〉建物を、〈ええ〉作ります、〈ええ〉作り方、〈ええ〉人、〈ええ〉の、〈ええ〉仕事です

T : あーじゃ 建築家ですか

S : ええ、あー、絵を描きました (EIL01)

では、超級学習者の「こう」はどのようなものかを見てみる。結論から言えば、表面的には、母語話者との質的な違いはなかなかわからない。たとえば、次の例では、「①こう」は「教育大学短大を出る」という変化と連動しているし、「②こう」は、年齢から見た「子供」ではなく、成熟度から見た「子供」で「いわゆる」付の「子供」という意味である。つまり、ここでの「こう」は、この語を選択するに当たって、その対象の性質を表現するための心的な模索を反映する「こう」である。また、「③こう」「④こう」は、それぞれ、「ま、なんといいたらいいんでしょうかね」「～というかそんな感じ」といった表現を伴っているが、これは日本語母語話者に見られた共起パターンであり、「こう」の典型的な用法の一つと見られるものである。

26 T : あの一、で、罪になるというのは、〈はい〉罪になるんじゃないかなというのはもっと具体的にはどういうことですか

S : そうですねえ、わたしはその時やっぱり①こう教育大学短大ね、〈はい〉出て、先生になったのが、もう 2-4 の数えで 1 ぐらいかね、1 か 20 からはじまったので、人間的にもすごく自分が②こう子供だったんですね、③こうそのそんな立場学生とつきあったりした時に、まなんとゆつたらいいんでしょうかね、あんまりなんか自分の、感情的にね、自分をなんかそのまま④こう、こう剥きだしたというかそんな感じがするんですね、 (KS03)

もう 1 例見てみよう。27 の「①こう」は、「長いあいだ続く」という時間的な推移を指すものであり動的な内容を持っている。また、「②こう」はその直前に「なんと言いますか」という「こう」と共起度の高い表現が現れている。^(注8)

27 T : やっぱり体勢が違うと、仕事に対する考え方っていうの、ずいぶん変わってくるんでしょうかねえ

S : (...) 〈あーは一は一〉例えば、あの、生懸命やってて一でもあの、例えば、自分のこれから、ながーくですねえ、〈えーえー〉あの一できるようにですね、〈はい、ええ〉で、別に、毎晩、あの一遅くまでやらなくても、〈ええ〉①こう長いあいだ続くとかね、〈あーは〉そういうこと考えれば一、〈ええ〉ですから、えーなんと言いますか、〈ええ〉う、②こうせかせか、やらなくてですね、〈えーえーえー〉③こう適当にとか、〈えーえー〉ほどほどとか、〈ええ〉いいんじゃないですかとわたしは思います (CS02)

多くの例を挙げることは紙幅の関係でできないが、ほぼ母語話者の「こう」と同じように使われていると言ってよいと思われる。

あえて違いを挙げるとすると、出現の頻度という点で、母語話者といくぶんかの違いがあるように思われる。

- 28 (日本の大学生に何か言いたいことはな
いかと問われて)

S: あー、〈ええ〉そうですね、〈ええ〉え、
今急にですってというとなあ、あ、こ
うまとーん、めが良くないかもしれま
せんけど、〈はい〉なんか話では、に
ほんのこの家庭でですね、〈ええ〉あ
の一大学生一までこど育つのも大変
だし、〈ええ〉そして学費も大変一だ
そうですね、〈えーえーえーえーえー〉
ですから、あの親がそんなふうにな
生懸命、あの一、生懸命こう学費一
を、〈ええ〉こう、支払ってくれてい
るんですから、〈えーえー〉もう少し
ですね、〈ええ〉例えば国のためにな
くても、〈ええ〉親のためにもう少し
ですね、〈ええ〉真面目に勉強してあ
げたほうがいいじゃないですかと思
いますけど (CS02)

- 29 (ロールプレイで、子どもにその母親へ
の伝言を頼む)

S: うん、おかあさんにね、〈うん〉あし
たの朝ね、〈うん〉姫路の、〈うん〉モ
トスケのおばちゃんが、〈うん〉こ
うしんちゃんのうちに行くから一、〈ん〉
こうどこもこう外出しないで一、〈ん〉
家で待ってとってくれるようにいつて、
〈うん〉そうつたえてくれる、〈うん〉
(…)

27～29 の例には、「こう」がかなりの頻度で
現れるのであるが、母語話者の場合には、ひと
つのターンの中に複数現れるという例は少ない。
これが偶然なのか、それとも何らかの背景のあ
る現象なのかは、現段階ではよくわからない。
母語話者に見られる複数の「こう」が現れるの
はたとえば次のようなパターンである。

- 30 1: どうーなんでしょうねえー。と僕自身、
(1: うん) ①こう十代の頃から、
(1: うん) 喫煙、飲酒、その他、(1:
あはっ) ②こう、おいたをしてきたん
ですけれども、(1: はい) あ、自
分で思ったことは、僕 年浪人したん
ですね。 (Tom2)

- 31 2: えっと、ひとつ、村上龍の場合は大き
な①こう、社会的な規範というのが、
(1: うん) いくら若くて自由に過ご
していても、②こう目に見えないプレ
ッシャーとしてある、ということ、
(1: うん) 書いてるようなんですね。
(IOF)

これらの表現を、「こう X、こう Y」というパ
ターンと見ると、X がやや具体性のあるコトガラ
であり、Y がそれをやや抽象化してまとめる、
というように相互に関連のあるパターンとして見
ることができそうに思われる。

30 の X に当たる「十代の頃から喫煙、飲酒、
その他」という具体例は、Y の「おいた」でひ
とつのカテゴリにまとめられている。また、31
の X (「社会的な規範／若くて自由に過ごす」)
は、Y (「目に見えないプレッシャー」) でより
概念化されている。このように、「こう X、こう
Y」というパターンは、同じコトガラを、異なる
レベルで捉えようとするときに使われる形式で
あるともいえそうである。

これに対して、27～29 ではこのようなパターンにはなっておらず、ひとつの話題の展開の途中に「こう」が現れるパターンである。これは、どちらかと言えば、「あの一」などの出現パターンと似ているものであり、その点では、超級学習者と母語話者は、いくぶんかの違いがあるかもしれないが、この段階では、これ以上のことは言えない。

3-2. 「この一」の性質

最後に日本語学習者の「この一」について見てみよう。繰り返しになるが、KY コーパスには「この一」の例は少ない。また、「この一」がフィラーとしてよいか認定に迷うところもある。したがって以下は少数の例に基づく暫定的な観察というに止まらざるを得ない。その点をまずお断りしておく。先に、全体で5例内外としたが、そのほかの例は、次のようなものである。

32 T : こ 〈ええ〉 れと申しますと

S : いやいや、ここのこの足の、ここのソケット、、、あのあんたも2つあるでしょ、{カチカチ音} 〈ああ、はい〉 こんなの〈はい〉が、これを僕は、この一、金物のが入ってるんですよ、〈ああそうですか〉でも、これでもテニスやったりしますけどね、〈ああそうですか〉うん (ES02)

33 S : (….) まあ僕もあ、ね、ちょっとアメリカ人ということであんまりこう固いスピーチではね、まあおもしろくないかなあと、わたくし思うんですけどねまあこの、ちょっとこの、Tさんについてね、みなさんにねちょっといくつか、あーおもしろい、エピソードをちょっと、ご紹介したいんですけども、まあまずねえー彼はですね

(ES072)

34 S : (….) 今、中国ではよく、えーと、6 たす1、イコール7というような、あの一言い方があるんですね、(….) で、6 人に一、ろ、またこの、ひとりっ子ですから一、〈えーえー〉す*イコール7人でしょ、〈ええ〉大人6人全部この、ひとりっ子を一、あの一なんか、こういろいろやっ、やってあげてるお、あのひとりっ子にやってあげているんですね、〈えーえーえーはい〉ですかすごく甘やかしてて一、〈えーえ〉えい、えい、この一、えーっと、こうなんといいますか女の子だったら、しょう天使とかね、〈ええ〉あの男の子だったら、皇帝様とか、〈あーはあ〉というふうに、〈ええ〉で、甘やかしてあげて、やってるんですよ (….) (CS02)

それぞれの「この一」を見ると、32では「金物」、33では「エピソード」、34では「ひとりっ子」という語の前に出ているが、それぞれ特定のモノ、特定の人を指しているわけではない。いずれも、カテゴリ名であり、それぞれ「金物というもの」「エピソードというもの」「ひとりっ子というもの」というように、カテゴリへの当てはめを示しているにすぎない。これは、先に述べた母語話者の「この一」の用法と変わるところがない。同じものである。

このように観察してみると、KY コーパスが採用している OPI の能力区分は、実質的な日本語能力の違いをよく捉えているのではないと思われる。

超級で「こう」が多く現れ、また少数ながら「この一」が現れるということは、単にフィラーのレパートリーが拡大したというだけでなく、

実質的な表現の質に大きな変化があるということである。「こう」の出現は、その質的な変化を端的に示すものである。その質的な変化というものを言で言えば、表現対象を保持しつつ、その表現を自分のことばで自由に言語化できるということである。それまでの段階では、対象はあってもそれを言語化するだけの言語知識がなかったり、また、言語化处理のために、保持に資源が避けなかったりしていたわけである。それらの問題が解消され、より創造的で自由な表現の可能性が得られたのが、超級という段階の特徴ということになる。

4. まとめと今後の問題

本稿の検討でどのようなことがわかったかをまとめると次のようになる。

- 1) まず、母語話者のフィラー「こう」「この一」の性質については、次のように捉えた。

- ・「こう」の性質

「こう」は、心的に思い浮かべられた対象を、言語化のために分節し、表象的な把握を行うとともに、言語生成へと向かう心的な動きを、ある場合には括してまたある場合には時間的な流れの中で捉えつつ、言語化への動きを促進するものである。

- ・「この一」の性質

「この一」は、発話時に心内に思い浮かべられている対象について、その対象を把握し、表現するために必要なラベル、カテゴリ名、表現の探索を行っている時に出現し、仮の当てはめを行うことを示すものである。

- 2) 日本語学習者の場合、フィラー「こう」は、超級学習者になってはじめて現れることが見られたが、これは、自身の発話生成の過程に、イメージ的な要素の言語的な取り込みを

行いつつ発話を進めるという、より創造的な発話が行われるようになっているからである。

- 3) また、その方で、同じコ系フィラー「この一」がほとんど現れないことについては、通常の発話においては、内容をどう表現するかということは多く問題になるが、その対象にどのようなラベルを貼るかというようなことは、問題とはなることが多くないという事情を反映していると考えた。
- 4) フィラーは、発話において、言語的な発話形成にも寄与していると考えられる。ジェスチャーが身体動作を通してイメージを表象するものであるとするなら、フィラーも心的走査という心的な活動を通してイメージの表象を促すものと考えられる。

今後の課題としては、次のようなことが挙げられる。これは、他のフィラーについても同様であるが、ここで述べたフィラーと心的に保持されたイメージとの関係を探る方法である。これらを実証する方法を考え、具体的に実証することがこれからの課題である。

<注>

- 1: 山内博之 (2010) にも同様の指摘がある。
- 2: 「えー」「えーと」(特に「えーと」) は上級レベルで増加を見せるが、バラつきが多く、確実に出現が見られるのは超級からと見るのが妥当かもしれないが、この表では明確ではないので、上級に含ませておく。
- 3: EA02 などの記号は KY コーパスのものである。EA などの意味については本文を参照されたい。02 などの数字は話者番号である。また、T はインタビューアー、S は学習者を示す。
- 4: KY コーパスでは「日本」はひらがなで表記されていたが、見やすさのため、漢字表記に改めた。
- 5: フィラーとしての「この」は、その代表形として「この一」と表わすことにする。
- 6: T0m など、最後に m あるいは f が記されているものは、HCSJ から取られた例であり、HCSJ の話者に付けられた記号である。

- 7: 表象的ジェスチャーとは、喜多（2002）の区分によれば、ジェスチャーとその表現する意味との間に慣習的な関係のないもので、指示対象との類似性に基づき指示対象を表現するもの。
- 8: ただし、「③こう」は、適格な用法なのか判然としない。「②こう」の反復と見るのがよいかもしれない。

<参考文献>

- 喜多壮太郎（2002）『ジェスチャー—考えるからだ』金子書房（佐々木正人・国吉康夫編「シリーズ身体とシステム」）
- 小出慶一（2009）「平成19年度～平成21年度科研費報告書 日本語フィラーの体系化に関する調査研究」（課題番号：19520444、研究代表者小出慶一）非公刊
- 斎藤洋典・喜多壮太郎（2002）『ジェスチャー・行為・意味』共立出版
- 山内博之（2009）『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

<使用コーパス>

- 鎌田修・山内博之「KY コーパス」
- 北九州市立大学上村研究室「インタビュー形式による日本語会話データベース」

※この研究は、日本学術振興会科学研究補助金（基盤研究（C）：課題番号 22520520）を受けて行われた。